

琉球大学学術リポジトリ

Ryudai News Letter `17(Vol.22)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学 公開日: 2024-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 琉球大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002020344

News Letter

特集



イベント報告

文部科学省エントランス展示

特集



琉大対談

琉大を研究で元気に

Oct
2017
vol.

22

琉球大学広報誌

禁帯出

377.3

S0

22

中資雑誌

琉球大学附属図書館



0020228019472



国立大学法人琉球大学

University of the Ryukyus

輝く 琉大生

沖縄からアジアへトビタテ！留学JAPANー

「トビタテ！留学JAPAN」とは、官民協働で学生の海外留学を支援するプログラムです。

将来の沖縄産業界を牽引するグローバル人材、特にアジアとの架け橋となる人材の育成を目的として、

観光産業科学部 観光科学科4年
大城 愛永(おおしろまなえ)さん

ベトナム・ホーチミンの日系ホテルでインターンシップを行い、多くの方との出会いで多様な価値観に触れ視野が広がりました。将来は沖縄と東南アジアを結ぶ仕事に就きたいです。

大学院理工学研究科1年

阿波連 智恵(あはれんちえ)さん

学生が魅力に思う沖縄のIT産業を目指し、ベトナムと沖縄のIT企業でインターンシップを行いました。

目次

01 輝く琉大生

トビタテ！留学JAPAN

大城 愛永・阿波連 智恵・崎山 明香里・喜舎場 秀人

03 特集Ⅰ イベント報告

文部科学省エントランス展示

霞が関こども見学デー

05 特集Ⅱ 琉大対談

琉大を研究で元気に

研究企画室URA

殿岡 裕樹・昆 健志・高橋 そよ・井上 雄介

09 活躍する先輩

世界にはばたく先輩リケジョ

玉城 絵美

11 UR Topics

15 Information

地域企業(産)、大学等(学)及び沖縄県等(官)の連携によりアジア各国でのインターンシッププログラムを提供しており、毎年、参加学生は事前研修を経て10月から海外へ派遣され、語学研修(4週間)インターンシップ(8週間)を行います。



法文学部 国際言語文化学科3年
崎山 明香里(さきやまあかり)さん
私は、「子どもの貧困」に関心があり、支援策を学ぶためにNPOインターンシップをして来ました。

観光産業科学部 産業経営学科4年
喜舎場 秀人(きしゃばひでと)さん
インターン先や宿泊先の外国人と交流をしていくうちに、私は自身の知識と英語運用能力の乏しさに気づかされました。

表紙【事務局玄関前 ヒンブン】

ヒンブンはもともと中国語の屏風(ひんぷん)のこと。家の門の内側にある屏風型の壁で、目隠しの用途のほかに、角を曲がるのが苦手とされている沖縄の魔物が直進して屋敷内に入ってこないように魔除けの意味もあります。

島くとうば検索サイトより

<https://www.churashima.net/word/32.html>



琉球列島の生物多様性

琉球大学の生物多様性研究

琉球列島は、サンゴ礁と白い砂浜に緑取られ、照葉樹が深い緑の陰を落とす亜熱帯の美しい島々が弧状に連なっています。そこには、複雑な地史や亜熱帯海洋性の特異な気候を反映し、陸域から海域にかけて実に多様な生物が暮らしています。それら生物の中には、琉球列島の固有種や、日本ではここで見られない熱帯系の種などが数多く含まれており、生物多様性の極めて高い地域として知られています。

琉球大学では、このような特徴的な自然環境について、理学部、農学部、教育学部、熱帯生物圏研究センター、戦略的研究プロジェクトセンター、大学博物館（鳥樹館）などの学部やセンター等が連携して研究を進めています。また、フィールド施設としては、熱帯生物圏研究センターの湖底研究施設と西表研究施設、農学部の与那フィールドの3拠があります（図1）。

今回の展示では、琉球大学で進められている「琉球列島の生物多様性研究」について紹介します。



図1. 琉球大学のフィールド施設の概要と主な固有種(要)種。

イリオモテヤマネコの不思議

ネコ科動物の中には大陸にすむ種も島にすむ種もありますが、イリオモテヤマネコのすんでいる西表島は、世界中で一画狭い「ヤマネコのすむ島」です。つまり世界で最も小さな生息地で数万年にもわたって存続しているということがイリオモテヤマネコの大きな特徴なのです。なぜでしょう？ それをとくかぎの一つは、イリオモテヤマネコの食性にあります。

イリオモテヤマネコはオオコウモリなどの哺乳類、シロハラクイナやシロハラなどの鳥類、キシソエトカゲなどの爬虫類、サキシママダエリなどの両生類、コオロギ、ハッタなどの昆虫類、さらにはテナガエビなどの甲殻類まで幅広い食性を持っています。これも他のネコ科に比べて特異な生態です。西表島は、世界でも珍しい湿潤亜熱帯に属し、豊かな水系を持つ島です。そして、それに支えられた生物の多様性を持っています。イリオモテヤマネコは、それをうまく利用することでこの



図3. 野生のイリオモテヤマネコ(左)と生息地である西表島の豊かな水環境(右)。

島に適応して暮らす。食物連鎖のトップに立ち、肉食性の高いネコ科の動物がこの小さな島に生き延びて来たことそのものが、西表島の生物多様性の高さを示すものだと考えます。

琉球列島の複雑な成り立ち

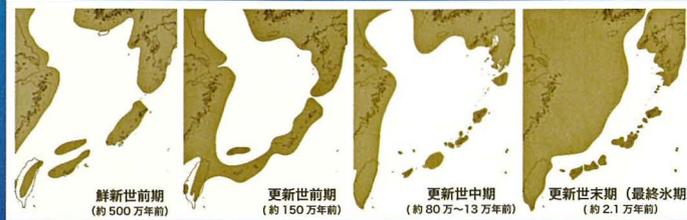


図2. 琉球列島の古地理。木崎・大城(1977, 1980)を基に古川・藤谷(2014)が作成した図を改変。

琉球列島は、九州南部から台湾に至る弧状の地形的高まりであり、これを断切りするトラカラ構造海峽とケラマ海裂によって、北・中・南に区分されます(図1)。現在の琉球列島の大半は海面下であり、その陸域である琉球列島の北東端に位置する大隅諸島は大隅海峽によって、南西端の与那国島は水深が500mを超える海峽(与那国海峽)によって、それぞれ九州・台湾と隔てられています。

琉球列島の現生の陸生生物相は、北部は九州、南部は台湾と共通性があり、また中部には遺存的な状態にある固有種が多く生息しています。このような生物分布の状況は、過去に琉球列島が一連の陸域であったこと、九州や台湾、ひいてはユーラシア大陸と陸続きであった可能性を強く示唆しています。この生物相の由来を説明するために、木崎・大城(1977)を嚆矢として多くの古地理図が作成され、生物の琉球列島への渡来時期・経路などが多分野の研究者により議論されてきました。

島々の形成と固有性の成立~陸生動物



図4. 琉球列島における両生類(左)と爬虫類(右)の分布図。

琉球列島に生息する両生類・陸生爬虫類の分布は種によって異なりますが、それらを一つの図の上を重ねてみれば、その法則性は明らかです。琉球列島は、生物の分布に基づいて奄美・沖縄諸島からなる中琉球地域と宮古・八重山諸島からなる南琉球に大別され、それぞれに固有種が集中していることがわかります。これは、それらの地域が何百万年もの前から海で隔てられ、海を渡れない陸生生物がそれぞれの地域で異なる種に分化してきたことを反映していると考えられています。

このように、隔離によって固有種が生じる地域を「固有中心」と呼びますが、トラカラ諸島の南部や宮古諸島も固有中心とみなす事ができます。ただし、その古地理学的な隔離の歴史には未解明な部分も多く、生物学

と地質学が相補的にデータを出し合って、理解を進めて行く必要があります。そこでその一つとして、DNAを用いて生物がいつ分かれたかを推定し、その年代を重ね合わせました(図5)。

その結果、奄美諸島と沖縄諸島には、更新世陸橋の崩壊(図2参照)による分化では説明がつかない古い要素を備えた種がいることがわかりました。また、台湾・八重山諸島集団のそれぞれの分類群の推定値は一致しているように見えるが、その推定値の幅は、鮮新世から更新世にかけてでした。すなわち、この2地域に現存する集団の分化のなごりは鮮新世の島嶼化に由来するものもあり、分化のタイミングと過程はいくつかあることがわかってきました。



図5. 琉球列島の両生類と爬虫類の推定分岐年代。



沖縄の自然を表現する大型パネルを展示(外側)
(画像提供元: 沖縄観光コンベンションビューロー)



大型パネル・標本・動画による展示(内側)

文部科学省東館エントランスホールにおいて、琉球大学の生物多様性研究を紹介する展示が行われました。

琉球列島には、陸域から海域にかけて実に多様な生物が暮らしており、日本ではここで見られない熱帯系の種などが多数含まれ、生物多様性の極めて高い地域として知られています。

琉球大学では、このような特徴的な自然環境を理学部・農学部・教育学部・熱帯生物圏研究センター・戦略的研究プロジェクトセンター・



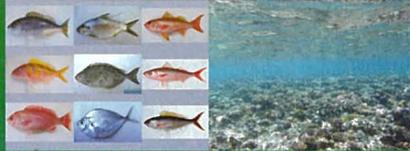
イリオモテヤマネコ



ヤンバルクイナ



地域と共に豊かな未来社会をデザインする大学
国立大学法人 琉球大学



Biodiversity in the Ryukyus

亜熱帯の島々は進化の舞台～陸生植物

温帯と熱帯の移行帯に位置する琉球列島の島々には、120種類を超える固有の植物が分布しています。その中には島々が孤立する過程で取り残された遺伝的な種もあり、隔離された島の中で新たに分化した種も少なくありません。例えば、暑さが苦手な温帯起源の植物の中には、島に閉じ込められた後、涼しい深流沿いに逃げ込むことで生き延びてきたものがあります。快速をうける深流沿いですが、大雨が降ると排水し、そこで暮らす植物は激しい水流にさらされます。この厳しい環境で生き延びるため、深流沿いの植物達は特殊な形態を獲得してきました(図6)。



図6. アカボシツツナミソウの深流環境への適応。多様な環境が箱底のように詰め込まれた亜熱帯の島々は、まさに固有種を生み出す進化の舞台といえるでしょう。

琉球列島と世界をつなぐ海流散布

琉球列島の海岸域に普通に見られるグンバイヒルガオ (*Ipomoea pes-caprae* ssp. *brasilienis*) は、熱帯域で地球を一周するような分布域を持っています。これほど広い分布域は、種子を海流で散布することで得られたと考えられています。実際、グンバイヒルガオの種子を海水に浮遊させる実験を行ったところ、多くの種子が2年近く浮遊しており、発芽能力も保っていました。

では、グンバイヒルガオは、これほど広い分布域をどのように維持しているのでしょうか？

その問いに対する一つの答えを得るために、集団間の遺伝子流動(交流の度合い)をDNAマーカーを用いて調べました。分布域内の各々からサンプルを採集し、7つの各遺伝子を用いて解析したところ、グンバイヒルガオは、大陸や大洋などの障壁を越え、どの地域間でも1世代あたり1個体以上移動していることが示されました(図7)。

この結果は、海流による種子散布が、非常に広い分布域の維持に貢献していることを示すものなどとも言え、海生動物の浮遊性による分布の拡大パターンと似ていると言えます(右上のコラムを参照してください)。

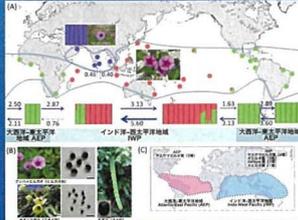


図7. 海流散布植物の分布パターン。(A) グンバイヒルガオの遺伝子流動パターン。●印はサンプリング地点、矢印は遺伝子流動の方向と1世代の移住率を示し、地球を一周するような遺伝子流動が示唆されました。(B) 代表的な熱帯海流散布植物の種子。数ヶ月から数年、水に浮いていられます。(C) マングローブ植物ヒルガオの分布パターン。分布域は大西洋-東太平洋地域とインド洋-西太平洋地域の2つに大きく分かれます。

浮遊期の長さや遺伝的な分化～海生動物

海生動物における大きな特徴の一つは、多くの種が浮遊幼生(稚子)期を持つことです。その浮遊期間の長さによって地域間の交流の程度が異なり、ある海生動物においては交流が少なければ、地域間で遺伝的な分化がみられることとなります。琉球列島に分布する海生動物でも同様のことが知られ、魚類ではゴマアユ、アユ、タナゴモドキ、甲殻類ではシオマネキ、シマイセエビ、頭足類ではアオリイカ類2種などを対象にDNAの解析がされています。

浮遊期間が1ヶ月以上におよぶ種類(タナゴモドキ、シマイセエビ、アオリイカ類の1種)では、遺伝的交流が活発におこなわれているのに対して、3週間程度の短い浮遊期間の種(ゴマアユ、アユ、シオマネキ、アオリイカ類の別の1種)では、地域間(南九州、奄美、沖縄、先島、台湾)に遺伝的差異があることが明らかになりました(図8)。



図8. 琉球列島周辺の海生動物の遺伝的変異。DNA解析によって明らかになった魚類の種管理単位。このようにDNAを用いて解析することにより、生物多様性の保全に重要な生物の遺伝的グループ、すなわち保全単位(進化的重要単位)を明らかにすることもできます。

北にありながら豊富～サンゴ礁生物



図9. サンゴの種数マップ。琉球列島はサンゴ礁域としては高緯度に位置しますが、極めて多くのサンゴ礁生物種が見られます。サンゴを例とすれば、世界で最も種数が多い地域は西太平洋の赤道を中心とするコーラルトライアングル(図中の「サンゴ種数60以上」)です。琉球列島は北緯24°より北にありながら、300種以上のサンゴが見られます。これは例えば、オーストラリアの同程度の緯度に分布するサンゴの種数よりも多いのです。また魚類などの他のサンゴ礁生物の種数も、琉球列島ではサンゴ同様に多いのです。

大学博物館(風樹館)などの学部やセンター等が連携して研究を進めています。

今回の展示では、琉球列島の生物多様性の成り立ちについて、大型のパネルを用いて、分かりやすく紹介するほか、イリオモテヤマネコなどの琉球列島固有(亜)種の貴重な剥製や昆虫の標本などが展示されました。

また、琉球大学のメインキャンパス及び生物多様性研究の基盤となる3つのフィールドを紹介する動画も放映されました。



ケナガネズミ

ヤンバルテナガコガネ

霞ヶ関ととも見学デー

～沖縄の自然を楽しく学ぼう！～
 平成29年8月2日(水)～平成29年8月3日(木)

こども見学デーでは、沖縄の珍しい昆虫類の標本のほか、オオコウモリやマングースの剥製、カエルやハブなどのプラスチック標本、チョウの鱗粉転写標本など、実際に標本に触れたり、昆虫クイズに挑戦しながら、沖縄の自然を楽しく学べる展示を行いました。



琉大を研究 で元気に

リサーチ・アドミニストレーター座談会 「琉球大学の知をささえる」



聞き手：本村 真
琉球大学 法文学部 教授
研究推進機構 副機構長
学長補佐（研究担当）

本村 琉球大学の「研究の今」を紹介しているこのコーナーですが、今回は少し視点を変えて、琉球大学を研究面で牽引するチームを紹介したいと思います。学生の皆さんは法文学部、農学部、医学部…と、それぞれの専門ごと学部にも所属していますが、大学には学部以外に、大学全体の活動を支える部署がいろいろあります。今日はその中から、研究推進機構 研究企画室に所属するリサーチ・アドミニストレーター（URA）4名に来て頂きました。いわば研究マネジメントのプロであるURAに、琉球大学で研究することの面白さ、研究視点での沖縄の魅力などについてお話を伺いたいと思います。URAの皆さん、どうぞよろしくお願ひします。

URA一同 よろしくお願ひします。

Ⅱ 「研究マネジメント」という新しい仕事

本村 まずはURAという、ほとんどの人が聞き慣れない職種についてから始めましょうか。「URAとは何か」について、簡単に説明してもらえますか？

殿岡 研究企画室で副室長を務めている殿岡です。URAについて説明するのに、まずは大学をめぐる社会情勢からお話を始めたいと思います。

本村 いきなり大きな話になりましたね。超少子高齢化とか、さらなるグローバル化により他国との競争が激しくなるとか、そういったことでしょうか。

殿岡 はい。国立大学が法人化され、また少子化が進んだ現在は、大学にとって自立と競争の時代に入っています。法人化したということは、ある意味会社と同じように自分たちの運営は自分たちで決め、戦略も自分たちで立案しなければいけない時代になったわけです。

本村 確かに、国立大学だった時代より「あれも決めなければいけない」「これも考えなければいけない」と、そのための会議がかなり多くなった気がしますね。

殿岡 社会からの要請も大きくなり、多様化しています。社

リサーチ・アドミニストレーター（Research Administrator）、頭文字に大学（University）のUを付けてURAと呼ばれる職種をご存じだろうか。全国の大学に導入が進められている、研究マネジメントの専門職である。琉球大学では2015年、大学全体の研究力を向上させる目的で研究推進機構を設立し、同時に4名のURAが活動を開始した。本稿ではURAという仕事を通して見た、琉大の魅力や可能性について語ってもらった。

会の中で琉球大学にどのような価値があるかということ、色んな形で明らかにしていく必要が出てきました。そこで琉球大学では、研究を熟知しつつ社会ともつながれる人材、様々な立場の人たちに対し、相手に応じた言葉で説明して琉球大学の価値を伝えられる人材、さらに、研究を通じて琉球大学そのものの価値を上げるような人材を導入し育成するために、研究企画室を作りました。今から2年前のことです。今日ここにいるメンバー4名は、いわば創立メンバーということになります。

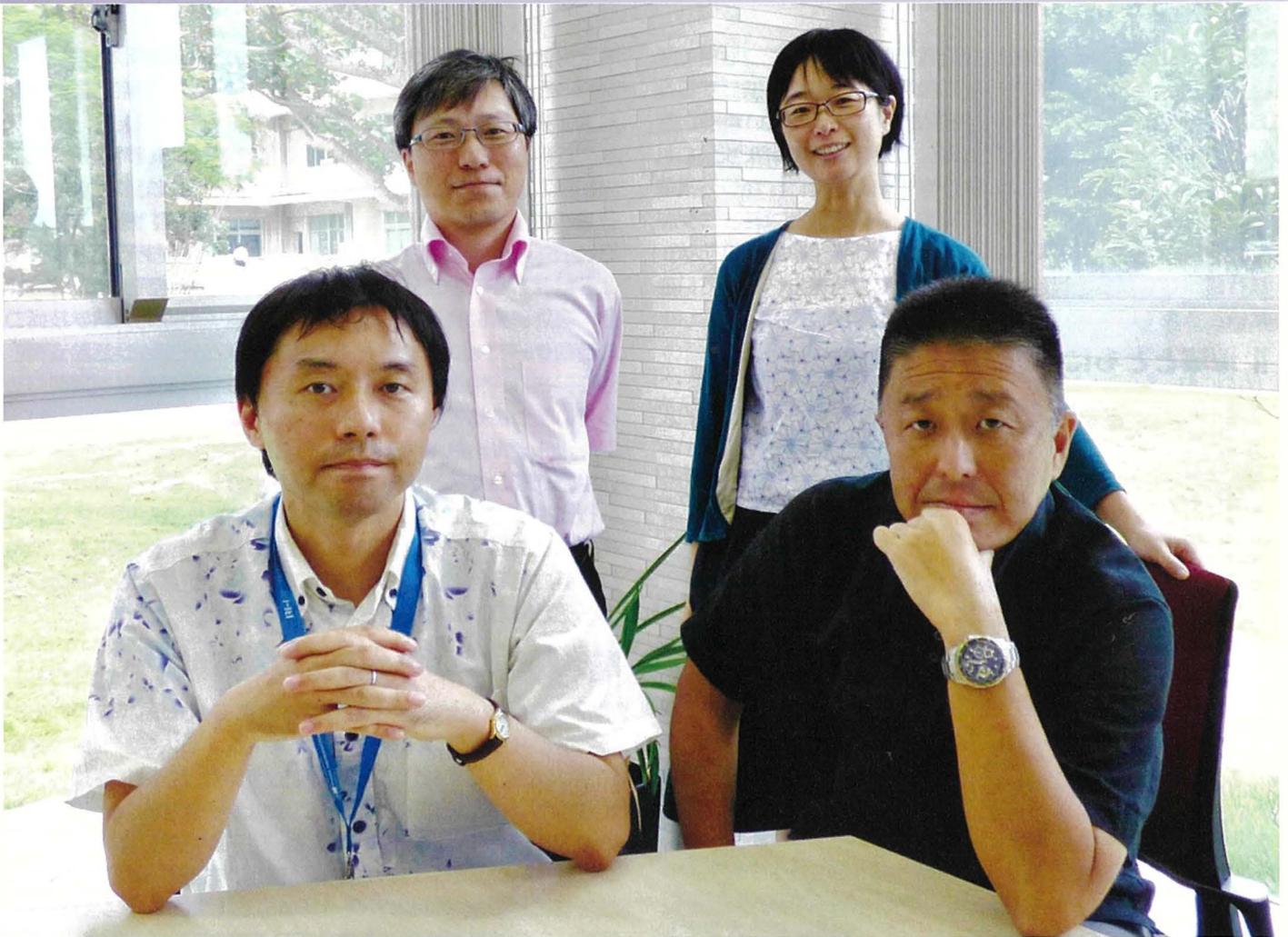
井上 琉大の価値を高める必要がどんどん高まっていて、そのために私たちはどこの学部にも属さず、琉球大学全体の研究を推進する組織に所属しているということです。

殿岡 大学には当然、学生を育てるという役割もありますし、最近では社会貢献も役割として期待されていますが、私たちは研究に特化して活動しています。これまでも例えば、琉球大学にはサンゴ礁の研究をしているすごい先生がいるとか、琉球史や琉球方言なら琉球大学に聞けとか、個々の価値があったと思いますが、それを今ある状態に留めず、より良い状態にしていくことを専門的に行う人材がURAであると考えています。

本村 研究から見た琉大の価値を高めるということですが、総合大学は全国にありますよね。それぞれの大学に強みや特徴があると思いますが、井上さん、琉大の強みについてはいかがでしょうか？



殿岡 裕樹(とのおか ゆうき)
長野県飯田市出身。1997年東北大学理学部生物学科卒、2002年 同大学院理学研究科修了。博士(理学)。2003年より山口大学にてNEDOフェロー、産学連携コーディネーター、URAを務め、2015年より現職。ライフサイエンス分野を専門とし、農業には特に思い入れが強いが実際の腕はからっきし。ミニトマトでギリギリのレベル。



井上 あらためまして、主に研究力分析などを担当している井上です。社会の中で生きる大学ということを考えて、自分たちの研究、大学の研究成果を社会にどうやって結びつけていくか、非常に大事なところだと思います。それから、自分たちの研究の立ち位置、大学の立ち位置をしっかりと分析することが重要です。最近では大学ランキングなどで大学が比較されるなか、この先どう大学が生き残っていくのか、そのための材料を得ることが大事だと私は思っています。

本村 大学人として、ランキングはどうしても気になってしまうところです。最近では学術論文などの研究成果だけではなく、獲得した研究資金なども評価の指標になっているようですね。

井上 研究資金、中でも国が準備し、研究者が申請をして審査に基づいて配分される科学研究費を獲得することは、研究者にとってとても重要です。この申請のためのガイドブックを私たちURAが作成しましたが、先生方にはたいへん好評で、研究費獲得に役立っているのではないかと感じています。

本村 新たな研究を展開させるための「材料」を手に入れて研究を発展させたい、そのためには新しい出会いや交流が必要だと感じている教員は多いと思います。けれども、日常業務が忙しいということもあって、研究者自身でそれを実現できるのは一部の先生に限られていたと思います。このような状況を変えるためのURAの役割について、昆さんどう思いますか？

昆 琉球大学を卒業し、念願になって13年ぶりに戻ってきました昆です。実際にURAをやってみて、何でも屋のような側面もあると感じています。琉大が研究で世界と戦っていくのに足りないピースが何かを探して、それを埋めていくようなイメージです。

本村 出会いや交流の場を作るために必要となることを含めて、琉球大学の研究に足りないピースを埋めるということでしょうか。高橋さん、今の件に関してご自身の経験からコメント頂けますか？

高橋 主に人文・社会系分野を担当している高橋です。私は、URAはピースをつなぐ糊だと思っています。大学の先生方は、意外と他の分野や学部の先生がどのような研究をしているのかわかりません。私は、ピースとピースをつなぎ、新しい絵を描くことができるように、ワークショップやサイエンスカフェなど、研究マッチングをおこなうための仕掛けづくりに取り組んでいます。時々、つなぎ役の糊がはみ出て、違う絵とつないだり、ピースの代わりとして粘土を貼り付けて立体的にしてみたり。URAとは、学術的に新しいことが創造される瞬間に立ち会うことのできる、黒子的な役割だと思っています。

本村 URAという専門職が入って、大学として組織的に新たな出会いを仕掛ける仕組みが出来つつあるという状況は研究者としてもとてもありがたいですね。

昆 私は研究推進機構の中で、学部を超えた研究プロジェクトの受け皿になる「戦略的研究プロジェクトセンター」の運営支援もしています。ここでは、異なった学問分野の協

働による新たな、そして有望な研究展開の芽がいくつも出てきました。異分野の研究者が相互に接触することを可能にする場の設定に、URAは大きな役割を果たしていると思います。また専門職という点では、研究広報にも力を入れています。これは大学の研究成果を社会に分かりやすく、正確に、かつ効果的に伝えるというもので、研究に対する深い理解とコミュニケーション能力の両方が高いレベルで求められる仕事になります。試行錯誤しながら、琉球大学の研究面での発信力を高めていきたいと考えています。

Ⅱ 地域とともにある琉大、その魅力とは



昆 健志 (こん たけし) 1993年琉球大学理学部海洋学科卒。2002年同大学理工学研究科修了。博士(理学)。東京大学、東邦大学等の研究員を経て、2015年より現職。主に研究広報、研究コンプライアンス、戦略的研究プロジェクトセンターの運営などを担当している。いつもの業務の他にはサンゴ礁の魚やナメクジウオの進化・多様性の研究にも勤しんでいる。

本村 殿岡さんからは研究面で価値を高める、という話がありましたが、URAの職務として、いわゆるアカデミックな目標に向かって支援する部分の他に、社会貢献に向けた社会との橋渡しの役割というのもあると思います。もしかしら大学によって、URAによって、イメージやエネルギーを割く割合が違うのではないかと推察します。地域貢献は本学のミッションですが、その点とURAの役割についてはどうでしょうか？

殿岡 沖縄にある大学ということ、沖縄によって生かされている大学でもあるわけで、地域社会との繋が

りも重要と考えています。研究者によって、自分は琉球大学に所属しているが世界を見て研究しているという人も当然いますし、いや、自分はこの沖縄の社会と直接向き合って、そこを研究のフィールドにしている、という研究者もいます。

井上 ひとくちに研究者といっても、色々ですね。

殿岡 そうです。琉球大学全体として考えた時には、例えば地域に対して発信する時には地域向きの研究者に登場してもらえば良いし、グローバルな競争力について発信したい場合はそれを得意とする人たちの出番という具合に考えています。URAは適切に、アピールする相手によって何をアピールするかというところを交通整理していく、ある意味矛盾するようなことでありますが、やり方次第できちんと発信できると考えています。

本村 次に、琉球大学の研究について、学生や保護者のみなさん、あるいは琉大と何かコラボしたいと思っている人たちに対して、「これが琉大の魅力です！」とアピールしたい部分について話していただけますか？

高橋 科学的な知見から、長期的な視野をもって現場の方と一緒に新しい社会をデザインし、研究者自身も島に生きる市民として社会実践できることが、琉球大学で研究することの強みだと思います。そして、環境や生態系、歴史や文化が多様な琉球列島は、研究テーマの宝庫であることが、研究フィールドとしての魅力だと思います。

昆 地域に根ざし、理系文系問わず幅広い分野を網羅できるの

も、地方にある総合大学ならではの、という感じがします。

高橋 私は今、琉球大学の自然科学系や社会科学系による学際的な研究チーム「水循環プロジェクト」のサポートをしています。このプロジェクトは、島嶼地域の貴重な水資源の持続可能な利用と保全という地域課題について、研究者だけではなく、行政や農業者、漁業者、教育関係者、NPO等、様々な立場の方との対話を重ねながら、どのような解決策があるかを探ることを目的としています。これまでの取り組みが評価され、今年度、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)「科学技術コミュニケーション推進事業未来共創イノベーション活動支援」に採択され、地域の方とのアクションリサーチなどを展開し始めているところです。

昆 URAが出会いの場を作ったことで理系・文系それぞれの先生方が参加する研究グループへと発展し、採択に繋がったという点も、ひとつのURAの活動成果と言えると思います。沖縄ではどの島でも観光業を柱にしている中で、水が環境、あるいは魅力ある自然、さらには海に与える影響は大きいものがあり、そういう点でも注目されると思います。

Ⅱ 琉大のこれから～研究の視点から～

本村 さて、琉球大学は2050年の創立100周年に向けて、『地域と共に豊かな未来社会をデザインする大学』という長期ビジョンを立てています。ここでいうデザインは、地域の人々と語り合うことなくしては描くことはできません。また、本学の国内外における位置付けとして、『アジア太平洋地域の卓越した教育研究拠点』という長期ビジョンも掲げられています。これらのビジョンに向けて、URAというポジションからみた課題、または可能性をどう考えていますか？

昆 そうですね、『アジア太平洋地域の卓越した教育研究拠点』ですが、例えば生物多様性の研究や環境問題の研究であれば、もうすでにそうなりつつあるのではないのでしょうか。特に南太平洋の島嶼国には短期大学しかない国も多いので、これらの国々から琉大の各学部に、大学院も含めて、プログラムを介して学生が来ています。

井上 すでに実績があると言えるわけです。そういう学生たちが育って、国に戻っても交流が続いて、更に次の学生が来るという循環ができれば、自ずとアジア太平洋地域の教育研究拠点になると思います。

昆 ただ一番の問題はやはり資金でしょうか。特に向こうでは修士課程を出て働いている研究者が多いので、琉大で研究して学位が欲しいと思っても、こちらから奨学金をもらって留学できる人は一人か二人くらいです。もっと資金面でサポートできれば交流が活発になり、お互いに盛り上がると思います。

本村 海外の卒業生とのネットワークの展開、とても楽しみです。



高橋 そよ (たかはし そよ) 北海道生まれ。2000年琉球大学法文学部卒、2008年京都大学大学院人間・環境学研究科修了。博士(人間・環境学)。米国・東西センターの客員研究員、国際NGOのプログラムオフィサー、琉球大学女性研究者支援事業のコーディネーターを経て、2015年より現職。

昆 はい。特に今、生物多様性の面でいえば遺伝資源の利用で、外国と契約などを交わす上で、例えばインドネシアで生物の研究をしようとする時に、向こうから許可をもらうかわりに、研究者を費用は琉大持ちで大学院生として受入れてくれないかという話は結構あります。そういう利益の分配みたいなところは、論文であれば共著者にするくらいしかありませんが、その他に研究者も育てて欲しいという要望が結構多いです。でするので、そのあたりにもっと力を注ぐことが出来れば、長期ビジョンが実現できるのではないかと考えています。

高橋 私はもうひとつやってみたくてあります。沖縄でしかできない国際展開として、世界のウチナンチュネットワークを使った研究を企画してみたいというのが次の夢です。

本村 すでにビジネスの世界では、WUB (Worldwide Uchinanchu Business Association) のネットワークもあるし、若者のネットワークも動きが出てきています。こうした動きに、研究も関わっていくということですね。

高橋 例えば世界規模の産学連携的な試みとか、何かを開発するとか、世界ビジネスへ向けてとか、いろいろな方法で、文系だけではなく理系からもウチナンチュネットワークを使った研究展開ができるのではないかと考えています。ウチナンチュネットワークと協働する研究は、沖縄の大学だからこそできるものです。

本村 長期ビジョンとしても非常に楽しくわくわくするような内容だと感じます。井上さんはいかがですか。

井上 はい、私が手がけている研究力分析の面からのコメントになりますが、アジア太平洋地域の卓抜した教育研究拠点となる大学を目指していくためには、研究成果を今以上に英語論文の形で世界に向けて発信していく必要があると考えています。その実現のためにも、私の主な担当である外部資金獲得のお手伝いをしっかりとやって行きたいと思っています。

本村 世界に情報発信し、留学生の受け入れを含めてグローバルな交流もさらに盛んになると、研究面が違う展開になってくるとは思いますが、殿岡さんいかがですか。

殿岡 先ほど、中・長期的な話もしましたが、もともと、日本の中で沖縄は地理的に非常に特殊なところにあります。亜熱帯気候で、しかも本土から遠く離れたところにあり、歴史的にも琉球王国という背景があり、中国との交流の歴史もありました。日本本土では全くみられないような動植物が微生物も含めて山ほどいますし、海にはサンゴ礁があり、土地は白い砂と赤い土で満ちています。研究の材料として見た時には、ある種の特殊性を持っているわけです。世界中から優れた研究者が実際に来ていますし、琉球大学でそれを最大限に生かした研究をしている人も大勢いますので、この魅力が国内外に発信されることによって、優れた研究者が集まって来る、そういう良い循環ができると考えています。

昆 確かにそうですね。今、琉球大学には優れた研究者たちがいますし、次世代の優れた研究者を育てている実績のある分野も複数あります。ですから、さらにいい研究者が琉球大学に来て、いい研究をして、その結果いい人材が育っていくということが、十年単位の話になりますが、実現すれば素晴らしいと思います。

井上 大学受験における偏差値という物差しで見ると、琉球大学の現在の偏差値は必ずしも高くはありませんが、それはあくまで受験偏差値であって、そこでやっている研究が優れた研究

で、優れている事実がきちんと客観的に示されると、偏差値とは異なる評価が得られると思います。

高橋 それに沖縄は島ですから、アジア太平洋の島国の人々が沖縄に来て、沖縄をフィールドにして研究し、教育を受ければ、彼らの国に帰った時に直で利用できるものがたくさんありますよね。果たすべき役割みたいなものは、ある程度地理的な要因によることもありますので、最大限に活かしたほうがいい。琉大は今、そういう方向に動いていると思います。

本村 十年、二十年のスパンで考えて、URAがどういう活躍をみせて、琉大が面白い研究をどう展開していくのか、今日うかがった話をもとにしていろいろと想像できて楽しみです。それでは最後に、研究企画室・URAとしてのアピールをお願いします。

殿岡 URAは文部科学省が制度設計して大学に導入された専門人材ですが、この新しい職種を何かに例えられないかということで、「URAは作家に対する編集者のような存在」という説明がされました。研究者というのはプロの作家で、書きたいように作品を書いていく。それを売れる本にするためにあらゆることをやるのが編集者。研究者との関係では、伴走者とか併走者とも言われます。

本村 作家と編集者、ですか。なるほど。

殿岡 一緒に研究を作り上げていく上で必要なことは、全部やるということです。例えば競争的な資金の獲得は当然しなければならぬし、研究費を獲得したら、今度はそれをうまく活用しなければいけない。研究活動の中で、高橋さんがさっき言ったように、誰かと繋がってよりそれを大きくしていく必要もあるでしょうし、良い成果が出てきたら今度はそれを適切な形で外に見せる…。これは昆さんが中心になって手がけている研究広報という仕事になります。さらにそれを次に繋げるためには、井上さんがやっているような仕事。今自分がどういう立ち位置で、次はどこにいったらそれが最大限に活用出来るかという分析が必要になります。研究を最大化するために必要なことを何でもやるというURA。それを端的に表すのが編集者ということなのだとして理解しています。琉球大学は地方国立大学で規模も中くらい、という立ち位置があるわけで、それに合った制度をこれから作っていったらいいと思います。

本村 ありがとうございます。URAの皆さんのこれからの活躍を、一研究者としても頼りにしています。

URA一同 ありがとうございます。琉大を研究で元気にするよう、さらに頑張りたいと思います。



井上 雄介(いのうえ かつゆき)
2002年東京大学農学部卒、
2009年同大学院農学生命科学研究科修了。博士(農学)。東京大学大気海洋研究所特任研究員、2013年新潟大学研究企画室URAを経て2015年より現職。2000年から陸上競技の審判員、2010年より日本陸上競技連盟公認A級審判員。現在月に数回の審判を務める。

世界にはばたく 先輩リケジョ

玉城 絵美
Emi Tamaki

沖縄県出身、琉球大学工学部卒。未来のノーベル賞候補として注目を集める研究者。東京大学大学院博士課程在学中に、コンピューターで人の手を自由に動かすことができる「ポゼストハンド」を開発し、米「TIME」誌で「世界の発明50」に選ばれた。H2L株式会社 創業者、早稲田大学創造理工学研究科准教授でありながら、外務省 WINDS（女性の理系キャリア促進のためのイニシアティブ）大使、JST さきがけ 研究員、内閣府総合科学技術・イノベーション会議 科学技術イノベーション政策推進専門調査会専門委員、等々を務め、多忙を極める毎日を送っている。



ロボット研究へのきっかけ

高校生のときに入院生活が始まったのがロボットに興味をもったきっかけだという。「病院の外に出る方法を考えていたら、ロボットを身代わりにして外出出来るらしいことが分かったのですが、そういうロボットは販売もされていないし、研究もまだ終わっていないとのことだった。それなら仕方がない、自分でやろうと思いました」と笑う。琉球大学医学部附属病院に入院していたため、ご両親から琉球大学なら近いから行ってもよいとの許可を得たそうである。

しかし、入学してみると琉大にはロボット工学分野の研究室がなかった。そこで、近い分野の當間愛晃（とうま なるあき）先生に師事した。「普通はどこでも、専門分野がなかったら諦めるしかないのですが、當間先生はご自分が基礎研究寄りですが私が応用研究だったので、基礎研究としてもありがたいからどんどんやってくださいとおっしゃって、一緒にやらせて頂きました。当時は、よく當間先生と近くの研究室の河野先生と私の3人で、どうすれば私のやりたいことを実現

できるかディスカッションしていました。卒業後のプランも考えてくださった」とのこと。きちんとディスカッションしたおかげで、自分のやりたいことが明確になったと、先生方との緊密な議論のありがたさを振り返る。「あれがなければ、転職ばかりしていたかニートになっていたかもしれません（笑）。指導する立場になって、それがどれだけ大変なことかよく分かりました。よくあれだけ時間をかけて頂いたと思います」

教員と学生の距離が近い琉大

さらに、教員と学生の距離が近いのが琉大の大きな特徴だと玉城さんは言う。「入院している間も手厚くサポートして頂きました。後で聞くと教授会でも、こういう学生がいるから配慮しようと話し合ってくださいました。また、多くの大学では、研究室の先生と学部生の間には博士課程の学生や助教というワンクッションがあって、卒業までに直接2人でディスカッションする機会など3~4回あれば良いと思うのですが、琉大の先生はほぼ全員に何度もディスカッションしている印象があります。ありがたく、不思議な文化です。」そして、学生へ次

のようなアドバイスも。「せっかく協力的な教員が多いのだから、ぜひ教員ともっと話しをすることをお勧めします。なかなか捕まらない教員はご飯のついでに誘ったらよいですよ」

琉大生の生活はクオリティーが高い！

「琉大生の生活はおしゃれです。」琉大の学生が聞いたら驚くような意見だ。「他府県の大学生なら、普通は、講義が早く終わったらカラオケにいったりするんです。琉大生は、テニスをして、夕方は皆でバーベキューをしたりするじゃないですか。ビーチパーティーをして、夜はカフェでディスカッションして1日が終わったり、おしゃれですよ。琉大には“イカコン”（イカ釣りコンパ）というすごく有名な交流会があって、早稲田の子もわざわざ東京から琉球大学に遊びに行くんです。琉大生は生活のクオリティーが高くて、充実しているんですよ」とのことだ。

また、後輩にはもっと自信をもってほしいと言う。「就活などで、琉大生は、どうせ自分のブランド力は低いのだろうと考えがちな子が多いのですが、そんなことは全くありません。もっと自分に自信をもって積極的に売り出してほしいです」

琉大卒業後に修士を玉城さんの下でと希望する学生にも門戸を開いている。「学生としてでも、インターンとしてでもウェルカムです。認知心理学や生態学の先生と共同研究をしているので、工学系に限っていません。学生の中に、実際の交渉現場を見てみたいとか、どんなふうに世の中が、ビジネスが動いているかを見たいという場合は、インターンとして会社に紹介することもできます」

リケジョだからできること

理系の研究者に女性は少ない。玉城さんが専門にするロボット工学の分野では特に少ないが、女性であることのデメリットは感じないという。「仕事をするようになって、あまりにも女性が少ないので、コミュニティ形成が難しいということはありません。しかし、研究者は他の人と同じことをしては駄目なので、女性といういわば異質な存在であることは、つまり違う視点を持っているということ

で、自分なりの新しいニッチな分野を築けるという意味ではむしろメリットになると思います」とポジティブだ。

ロボットと人との体のシェアから、 人と人との体のシェアへ

PossessedHandポゼストハンドは研究者向け、次に出されたUnlimitedHandアンリミテッドハンドはAR、VRの開発者向けだったが、いよいよ一般ユーザー向けのものが今年発売されるという。「その次に出るのは、VR、ARゲームで、ゲームのキャラクターと体をシェアするものです。キャラクターが攻撃を受けたら自分も気分が悪くなるとか、完全に没入する状態になったときに、何が起きるかを研究しています。そのように意識が移動するところで、認知心理学や生態学分野の研究者と共同で、ロボットと体をシェアしたら人がどう変わるのか調査したり、人類の生態がどう変わるのかシミュレーションしたりする研究をしています」と、まさにSFの世界であるが、さらに最終的には、人と人が体を共有することを目指しているとのことだ。「『君の名は』のように身体が入れ替わっている状態です。そして男女の差もなくなってしまうかもしれませんね。そこまで普及するのは、多分50年後ぐらいかなと思っています」と、気負いなく語る姿はキラキラと輝いて見えた。

インタビュアー：小西照子（学長補佐、農学部准教授）

※新海 誠 監督作のアニメーション映画



沖縄県初！

二人の心臓血管外科専門医師誕生

平成29年1月、第二外科の仲榮眞盛保医師と新垣涼子医師の2名が本邦における専門医資格の中で最も難しいといわれる心臓血管外科専門医の資格を取得しました。

仲榮眞医師は九州地区の200余名の全心臓血管外科専門医中わずか数名であり、沖縄県での30名の専門医の中では初となる末梢血管領域での本専門医資格、新垣医師は成人心臓外科領域での取得となり、女性医師としては九州地区でも4人目、沖縄県では初となります。いずれも沖縄県での末梢血管領域、女性医師としての初の心臓血管外科専門医です。今後の活躍が大いに楽しみです。



(左から) 新垣医師、國吉教授、仲榮眞医師

株式会社かりゆしと国立大学法人琉球大学

観光産業科学部が包括連携に関する協定書を締結

本学観光産業科学部には、平成24年から「かりゆし基金」という観光人材育成研修プログラム（過去5年間で述べ149名の学生が海外・国内での研修を経験）やインターンシップにおける協力・連携体制がありますが、4月20日(木)、継続的・発展的な協力・連携体制の維持と、社会の発展と教養豊かな国際人材育成に寄与することを目的として、観光産業科学部と(株)かりゆしが、「包括連携に関する協定」を締結しました。

本連携協定の締結により、下地観光産業科学部長の挨拶でも述べられたように「学問から学ぶ」ことは当然のこととして、実践的な学びとのバランスを図って、いくような人材育成に寄与する、地域発展・観光ビジネスに目を向けたソフト面、ハード面で双方の強みを生かした人的交流および、有機的連携協力が推進されることとなります。



署名後の記念撮影



学生も一緒に記念撮影

琉球大学ブランド商品

「琉球大学ロマン」販売開始

平成29年5月、琉球大学ブランド商品のスープキーマカレー、「琉球大学ロマン」が琉球大学生協にて発売開始されました。

「琉球大学ロマン」は、農学部（本村恵二教授）と本部町の農家とで共同開発した春ウコン「琉大CL2号」を使って作られており、県内でカレー店を展開している「(株)あじとや」の協力を受けて開発されたスープキーマカレーのレトルト商品となっています。

1個600円(税別)で、大学生協のほかにも那覇空港、あじとや(首里店、泡瀬店、北谷店)、沖縄CLIPマルシェで販売されています。商品をお見かけの際は、ぜひご賞味ください。



琉球大学生協での販売様子

「山野ビッグ・バンド・ジャズ・コンテスト西日本予選入賞」

本学のモダンジャズオーケストラ(通称MOJO(モジョ))が、5月14日(日)に開催された「山野ビッグ・バンド・ジャズ・コンテスト」(年に一度、全国から予選を勝ち抜いた全35大学のビッグバンドジャズサークルが集まって腕を競い合う「学生ビッグバンド界の甲子園」です)西日本予選に出場し、並居る強豪を抑え、見事5位入賞を果たしました。これにより8月12日(土)、13日(日)に東京国際フォーラムで開催される本選への出場が決定しました。上記コンテストのチケットは一般販売もされ、毎年通うファンの方もいるほど注目度が高く、プロも輩出するアマチュアジャズ界では最高峰の歴史と伝統を持つコンテストです。

西日本予選終了後の集合写真



YAMANO BIG BAND JAZZ CONTEST ホームページ
<https://www.yamano-music.co.jp/docs/ybbjc/#list>

全国初の試み 琉球大学法科大学院と 沖縄少年院・沖縄女子学園が協定締結

全国初の試みとして、6月5日(月)、琉球大学法科大学院（琉球大学大学院法務研究科）は、従来の法律事務所や銀行等のエクスターンシップに加えて、新たに「沖縄少年院・沖縄女子学園」とエクスターンシップに関する協定を結びました。

本協定は、法科大学院の学生が、沖縄少年院・沖縄女子学園で実際に指導する法務教官の下、矯正教育について一定期間、研修を実施、これを法科大学院の単位とするものです。非行少年について、法曹になる前に現場で学生に学ばせたいという法科大学院側と、少年審判における弁護士としての活動（付添人）を目指す学生、双方の熱い要望が合致し、実現に至りました。

関係者の集合写真→



↑（左から）清水法務研究科長、渡辺沖縄少年院長



医学部学生が「第1回薬剤耐性(AMR) 対策普及啓発活動」で議長賞受賞

6月26日(月)に開催された「第1回薬剤耐性（AMR）対策普及啓発活動」の表彰式で、「スマイル・フューチャー・ジャパン（SFJ）」が、薬剤耐性対策推進国民啓発会議議長賞を受賞しました。SFJは仙台、東京、沖縄の3地域を中心として活動しており、薬剤耐性菌の問題に取り組む、抗菌薬の使用について周知・啓発する活動を行っている学生団体です。表彰式へは、沖縄支部代表として医学部5年生の宮城孝雅さんが参加しました。沖縄支部では、抗菌薬を正しく使うよう呼びかけるポスターを作成し、県内の医療機関に配布も行っています。また、その活動が高く評価され、地元新聞紙やテレビにも取り上げられました。今後のさらなる活躍が期待されます。

表彰をうけたSFJの学生たち。

左端が沖縄支部の宮城孝雅さん。



「水の環プロジェクト」スタート！

平成29年7月、琉球大学の自然科学系や社会科学系による超学際的な研究「水の環でつなげる南の島の暮らし（通称 水の環プロジェクト）」が、国立研究開発法人科学技術振興機構「科学技術コミュニケーション推進事業未来共創イノベーション活動支援」に採択されました。島嶼地域の貴重な水資源の持続可能な利用と保全という地域課題について、研究者だけではなく、学生や行政、農業者、漁業者、教育関係者、NPOなど、様々な立場の方との対話を重ね、解決策を探ります。水行政者を対象とするワークショップ、湧水の自然や文化を知るための市民参加型アクションリサーチ、科学教室などを企画しています。



研究者による科学教室
（多良間島）



井戸の水質調査をおこなう
研究者と学生

H29年度「ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」開催

7月16日(日)に「実感！体感！サンゴ礁生物の不思議」と題して体験型の科学プログラムが開催され、県内外の学生と家族20名（小学生2名，中学生4名，高校生4名，保護者等10名）が参加しました。本プログラムは、独立行政法人日本学術振興会の実施事業の一環で、最先端の研究成果と触れあうことで、科学のおもしろさを感じてもらうことを目的に全国の大学等で実施されているプログラムです。今回は、理学部の竹村明洋教授を中心に、瀬底島にある熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設を会場として、サンゴ類と魚類について、船や海岸からのサンゴ礁観察や、研究施設の見学が行われました。

当日は快晴に恵まれ、沖縄の美しい海とサンゴ礁を十分に観察することができました。プログラム終盤には修了式が行われ、参加者に未来博士号が授与されました。



受講生とサポーター



飼育サンゴ類の説明



プログラム終了記念撮影

琉球大学ブランド商品 「琉球の泡盛」販売開始

7月14日(金)より、琉球大学ブランド商品「琉球大学の泡盛」が琉球大学生協にて発売開始になりました。「琉球大学の泡盛」は、農学部(外山博英教授)によって得られた「R217酵母」を用いて、(株)バイオジェットと(株)石川酒造場の協力を受け、伝統的な甕仕込みにより醸造された、琉球大学オリジナルブランドの泡盛です。

「琉球大学の泡盛」は500mlで1800円(税別)の値段で、琉球大学生協と(株)石川酒造場にて販売しております。従来の泡盛に比べ果実様や花様の複数の香気成分濃度が上昇し、甘く口当たりが柔らかい、普段泡盛を飲まれない方も飲みやすい泡盛となっております。また、瓶のラベル作成には農学部の学生も関わっており、「芭蕉の葉」と「羽ペン」をイメージしたデザインとなっております。商品をお見かけの際は、ぜひご賞味くださいませ。



琉球大学生協での販売様子→

市民公開講座『形成外科での 「かたちの治療」』を開催

7月19日(水)、沖縄県立博物館・美術館にて市民公開講座『形成外科での「かたちの治療」』が開催されました。

形成外科は、うまれつきの変形やケガ、癌切除などに伴う変形を治療する診療科です。最近では医療機器の開発や再生医療の進歩にとともに、体に負担をかけずに、きれいに変形を治す治療法も発展しています。

琉球大学医学部附属病院においても、平成27年に形成外科が開設されており、今回は「かたちの異常」をおこす病気やケガ、そしてそれらの治療法についての正しい知識を広め、県民の健康・生活の質を高めることを目標に、本講座が開催され、多くの参加者が訪れました。

[H29 琉球大学市民公開講座 No.68] 市民公開講座開催

形成外科での「かたちの治療」

「かたちを治すプロ」
「乳癌再発とボディの形成治療」
「リンパ腫」

平成29年 8/19(水) 会場 沖縄県立博物館・美術館(講座室)
【開催時間】14:00~16:00(開場13:30)
受講料無料
定員100名(要予約・先着順)
電話 098-895-8019
098-895-8161
098-895-8162
098-895-8163
098-895-8164
098-895-8165
098-895-8166
098-895-8167
098-895-8168
098-895-8169
098-895-8170
098-895-8171
098-895-8172
098-895-8173
098-895-8174
098-895-8175
098-895-8176
098-895-8177
098-895-8178
098-895-8179
098-895-8180
098-895-8181
098-895-8182
098-895-8183
098-895-8184
098-895-8185
098-895-8186
098-895-8187
098-895-8188
098-895-8189
098-895-8190
098-895-8191
098-895-8192
098-895-8193
098-895-8194
098-895-8195
098-895-8196
098-895-8197
098-895-8198
098-895-8199
098-895-8200

「2017高校生医療者体験」を開催

8月8日(火)、琉球大学医学部附属病院内おきなわクリニカルシミュレーションセンターにて県内高校在校生を対象としたイベント「2017高校生医療者体験」が開催されました。

医療者がトレーニングで実際に使用するシミュレータを利用して体験することで、医療に関する仕事に関心を持ってもらうことを目的に開催されており、これを機に、多くの高校生が医療を支える人材に育っていくことを期待して実施されたものです。参加した高校生たちは、「診察体験」「手術体験」「救急救命体験」の3つのブースを回って、聴診器などの診察道具を使ってみたり、手術器具を触ったり、心肺蘇生方法を学んだりといった様々な体験を通じて医療現場の空気を体感していました。

高校生医療者体験

受付 13:30~14:00
開場 14:00~17:00
定員: 30名

高校生医療者体験の3つのブース

1. 診察体験
2. 手術体験
3. 救急救命体験

申込期間: 7/10(月)~7/30(金)
申込先: 098-895-8161
HP: http://okinawa-clinical-sim.org/

「Kid's Sim 2017」を開催

8月9日(水)、琉球大学医学部附属病院内おきなわクリニカルシミュレーションセンターにて、県内小学生5・6年生を対象に、「ときどきする」「うまれる」「食べる」「いきをする」をテーマに身体について学ぶイベント「Kid's Sim 2017」が開催されました。将来医療に関する仕事に興味を持ってもらうことを目的に開催されたものです。

本イベントでは医療者がトレーニングで実際に使用するシミュレータを利用した楽しい体験ができ、夏休みの自由研究の材料として参加した小学生も多く見られ、好評を博しました。

第6回 琉球大学医学部附属病院 小・中学生向けクリニカルシミュレーションセンター 講座

Kid's Sim 2017

カッパのしくみを知らぼう
うまれる
ときどきする
いきをする
たべる

2017. 8/9 (Wed) 受付 13:30~14:00 開場 14:00~17:00

申込期間: 7/10(月)~7/28(金)

申込先: 098-895-8161
HP: http://okinawa-clinical-sim.org/

対馬でカワウソを発見！

琉球大学が、長崎県対馬においてツシマヤマネコの生態調査のために設置した自動撮影装置によって、平成29年2月6日にカワウソの動画が撮影されました。今回のカワウソの発見は日本における38年ぶりの生体確認です。

ニホンカワウソは明治までは全国に生息していましたが、毛皮や薬種を目的とした狩猟に加え、生息地の破壊によって、79年高知県での目撃を最後に、2012年に「絶滅」に指定されました。

今回撮影された個体については、種の同定はできませんでしたが、個体の由来については「対馬において細々と生き残っていた」、「韓国から泳いで渡ってきた」や「人間活動によって海外から移動してきた」などの説があります。

8月17日(木)、琉球大学が記者会見を行い、それをうけて今後は、環境省が7月からカワウソの糞や巣を探す痕跡調査を始めています。



(左から)中西研究員、伊澤教授

「国立大学法人琉球大学 大学説明会 in 東京」を開催

「国立大学法人琉球大学大学説明会 in 東京」が8月25日(金)、東京工業大学キャンパス・イノベーションセンターで開催され、関東エリアの高校を中心に約130人の高校生と保護者が訪れました。東京で説明会を行うのは今回が初めてで、沖縄で実施するオープンキャンパスに参加できない県外の高校からの要望等もあり実現させたものです。

本学の特色や入試情報についての概要説明や各学部教授による研究・教育紹介に加え、入学者選抜方法等の変更については、沖縄と東京をスカイプで繋いだ質疑応答が行われました。

さらに個別相談ブース(理学部、医学部、工学部、農学部)も設置し、入試制度や沖縄での生活等に関する多くの質問にも対応し、参加者からは「参考になった」、「沖縄に興味を持てた」と好評でした。



琉球大学概要の説明
会場の様子

個別相談の様子

医学部の研究・
教育紹介の様子

学生企画の商品と webがJTAに登場！

課題解決型の新しいスタイルを取り入れた「産学連携サービス経営人材育成事業」で開講した「JTA×琉球大学インターンシップ特別コース」で、観光産業科学部の学生5名(二階堂美南・照屋華楠・仲村渠裕斗・大濱里穂・梶祐太郎)が機内販売商品「ちゅらちゅらピアス」の商品開発とWeb制作企画を手掛けました。

本コースでは「宮古島ならではの商品を開発し、若年層の閲覧数をあげる」という課題を受け、ターゲットを県内外20~40代女性に絞り、アンケートを実施しました。

現地における機内販売に適した商品の検分・選定、さらにJTA社員へのプレゼンを経て、9月1日(金)より日本トランスオーシャン航空全路線の機内、及びJTAのWebサイト内で2ヶ月限定の販売、公開となりました。

ちゅらちゅらピアス
↓ Web画面



「ジュニアドクター育成塾」を開校

琉球大学は、理数・情報分野で高い意欲や突出した能力を持つ小学5・6年生、中学生を発掘、育成する科学技術振興機構主催のジュニアドクター育成塾に「美ら海・美ら島の未来を担う科学者養成プログラム」(琉大ハカセ塾)を提案し、採択されました。離島を含む県内90名の応募者から、第一期生44名を選抜し、8月26日(土)に開校式を、9月2日(土)に「科学とは何か、科学者とは何をするのか」をテーマに第1回の講義を行いました。受講生はそれぞれの考えを発表し、同日開催の「沖縄科学技術教育シンポジウム2017」の研究発表を聴くなどして、琉大ハカセ塾で学ぶことや、研究することについて理解を深めました。今後は、理学部・教育学部の教員を中心に、フィボナッチ数列、物質の成り立ち、地球環境の変化等について、平成30年2月まで月2回づつ講義を行う予定です。



開校式後の記念撮影

熱心に聞き入るジュニアドクターたち

学生たちの支援や大学の活動のための 琉球大学基金

琉球大学では、学生支援・教育研究活動を強化し、地域社会・国際社会へ還元していく事を目的に「琉球大学基金」を創設しました。
本基金の趣旨にご賛同いただき、格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



第16代学長 大城 肇

寄附金の主な用途

琉球大学基金（一般基金）

- 学生の課外活動及び就職等への支援
- 社会との連携事業への支援
- 研究活動への支援
- 国際交流事業への支援

修学支援基金（特定基金）

- 経済的に修学が困難な学生への支援・給付型奨学金

本学では、経済的に修学が困難な学生(家計200万円未満の学生)に対する授業料免除などの支援を行っておりますが、十分には行き渡っておりません。



寄附支援の方法

〈オンラインからのご寄附〉

琉球大学基金Webサイトから、クレジットカード決済がご利用いただけます。
また、クレジットカード決済による継続的なご寄附も承っております。

〈口座振込によるご寄附〉

口座振込をご希望の方は、記入用紙等を送付しますので、琉球大学基金室へメールまたは電話にてご連絡ください。

税制上の優遇措置

個人からのご寄附は、「寄附金控除」の対象となり、税制上の優遇措置を受けることができます。
なお、修学支援基金へのご寄附については、従来の「所得控除」に加えて「税額控除」も適用になれます。
確定申告の際に、どちらか有利な方をご選択いただけます。

法人からのご寄附につきましては、「全額損金算入」が適用になれます。

詳細は、琉球大学基金webサイトをご覧ください。
<http://www.kikin.u-ryukyu.ac.jp>

【お問い合わせ先】 琉球大学基金室
〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

E-mail: kikin@to.jim.u-ryukyu.ac.jp
TEL: 098-895-9013
FAX: 098-895-8013

広報室長 編集後記

琉球大学では、広報力の強化をめざし、本年4月より新たに学長の下に各学部等から選出された委員をメンバーとする「広報戦略本部」を立ちあげました。

このニューズレターも、読者の方々が琉大を身近に感じていただけるように、よりホットな内容とすべく、同本部において全面的に構成を見直し、さらに、現在いくつかの新しい取り組みも進めております。一例をあげますと、大学のブランド力強化を目指し、本学のイメージをビジュアル的視点から表現する「UI（ユニバーサル・アイデンティティ）開発プロジェクト」、

本学の研究成果の一例の紹介として、琉球列島の生物多様性の研究を全国大学関係者に紹介した「文科省エントランス展示」のほか、大学概要など既存の媒体の見直しなどを行っております。

琉球大学は他の有力大学のように、潤沢な予算やマンパワーがあるわけではありませんが、熱意とアイデアで盛り上げていくべく、今後も鋭意努力してまいります。

新しいコンセプトのニューズレターのほか、広報戦略本部及び広報室の活動についても、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。是非、琉球大学ファンとして、今後とも本学へのご支援についてよろしく申し上げます。

News Letter Vol. 22

2017年10月発行
琉球大学広報室



〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町字千原1番地
TEL: 098-895-8175
kohokoho@to.jim.u-ryukyu.ac.jp
<http://www.u-ryukyu.ac.jp/>